

---

# キュクスの叫び

おかのん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キユクスの叫び

### 【Nコード】

N7283X

### 【作者名】

おかのん

### 【あらすじ】

ハルツ王国とエスハーン帝国。ハルツ側の持つ要塞『キユクス』の堅牢さに、長い間この二国に戦争も国交もなかった。

しかし二週間前のエスハーン帝国の突然の宣戦布告。

ハルツ側で獵師を営んでいたピニオンは、森で見つけた『あるもの』をめぐって戦争に巻き込まれる。

リアルト將軍に見込まれ、斥侯に出た先で知りえた事。

『あるもの』とのことも、調べに来た二人組、ラトとサリアを交えて変わってゆく。

## 訓練場の二人

達人との対峙…

それはそれだけで神経をすり減らす。

どこから来るか。

右か。左か。袈裟切りか、薙ぎか。

訓練用といっても、鉄の塊だ。鈍器でどつき合えば人は死ぬ。

「……………」

訓練場といっても、要は城砦の屋上だ。

シムメトリーになった峡谷を臨む、即席の試合場。

城壁と同じ煉瓦の床。秋らしい高い空に、まばらな雲。

互いに無言だが、様子は明らかに違う。

腰の引けた正眼と、側面を向けた無形。

こわばり、肩で息をし、構えを維持するだけで疲労している傍ら、  
相手は…

リアルトーストウィックは、剣の先を見つめるだけだ。

それはあまりにも自然体で、全く無駄がない。

ピニオン＝コンスタンツアの疲労は限界に近い。

だが、動くことも出来ない。

先に受けた疾風と鉄槌の合わさった剣戟の恐怖は、時間を負つて  
とに押し掛かる。

守りに徹して手加減されて、ようやく受けきれなのだ。

後の先にまわられては手の出しようがない。

どうしようもなかった。

リアルトは、この国の…ハルツ王国の將軍である。

やっと三十路に入っただけで、東方面軍の將軍なのだから大したものだ。

金色の長髪なので高貴な雰囲気かと思えば、碧い三白眼が思いのほか、人をすくませる。

その髪も日焼けしているのか、くすみが見て取れる。

狼に王族がいればあんな感じだろうという評価は褒め言葉なのだろうか。

対するピニオンは…ザクス山脈のハルツ領側で獵師を営んでいた少年だ。

定義次第では、16なのだから青年でもかまわなそうだが、若干平均以下の背が、それをなんとなく躊躇わせる。本人もそれは気にしていない。

極僅かに赤みがかってはいるが、黒髪の範疇だろう。

伸びてきたなと思ったら自分で切る程度の手入れなので、肩までかかりそうな髪。

大きな瞳とあいまって、女の子に見えそうだ。

ここまでくると彼自身も多少気にしている。

同じように動物にたとえれば羊かヤギか。

角がなさそうなのでメスのほうのイメージだという話を聞けば、さすがに彼も怒り出しそうである。

クンツ…

わずかにリアルトの剣が右上に上がる。

片足を下がらせることで踏み込みの形になる。

距離は変わらず間合いが変わる。

―来る!!!!!!!!!!

思う間もなく左下に潜り込まれる。

振り下ろす間に左を制され、そのまま逆袈裟に切り上げる時には後ろにまわられる。

切り上げた剣は逆手で縦に構えられた剣にさえぎられ、

「……………!!!!」

喉元には短剣が突きつけられる。

「す…」

「すみません…」

「『まいりました』だ」

「ま、まいりました!」

ふう、と、小さなため息が漏れる。

「…疲れていると思っておいてやる。最初の踏み込みが見えるだけで上出来だ。ピニオン」

自分でもそう思うピニオンだったが、リアルトが直々に稽古をつけている以上、プレッシャーは押し掛かる。

それに応えるだけの技量を身に付けねば、申し訳ない。

「…ありがとうございます」

ここは、『キュクス』

要塞キュクスだ。

ザクス山脈をはさんで分かれる二つの国。

ハルツ王国とエスハーン帝国は、今は国交が殆どない。

互いに他方面の強国との関係に力を入れていたこと。

ハルツ側が持つこの要塞、『キュクス』のあまりの堅牢さに、エスハーンが攻めあぐねた末に、不干渉の条約を結んだこと、ハルツ側に領土拡大の熱意が薄いことから、良くも悪くも衝突がなかった。

キュクスは、デズフ峡谷の間隙を埋める形で作られている。

まるで山の中腹が、砂山に穴を掘ろうとして掘り過ぎたような、もしくは猛獣の牙が逆さまに生えているような奇妙な形。深く掘られた堀と、半円形と直方の二段の壁。

向こうから見れば魔王の城に見えそうだ。

そんな関係と、静寂が破られたのが二週間前。

秋の初めの宣戦布告。

エスハーンからの宣言であった。

## 北の森（前書き）

ここで時間は巻き戻る。

ただの猟師であるはずのピニオンが、ここにいる理由。

それを知るには。彼の身に起こる半年前の出来事について理解せねばならないから。

重なる物語の片翼を綴る。

## 北の森

ピニオンは、村の北にある森を狩場に使っていた。

この森は、何故か奥に行くほど獲物が少ない。入り口となる周辺のほうが、緑や木々も豊かで動物も多く棲む。

普通は逆だ。

そもそも水源や豊かな土壌を中心に広がるのが森のはずである。

不思議に思う者は多かったが、しかし事実、奥に行くほどに木は枯れ、折り重なって道を塞ぎ、毒虫や蛇も多くなる。

わざわざ行く者はいなかった。

ピニオンは、少し違った。

すでに他界した祖父とは二人きりの家族で、弓の扱いを教えてくれた。

そして・・・

『森の奥には近づくな』

そう、口をすっぱくして言っていた。

若い頃、何か宝物でもあるのでは…とか、古代の遺跡でもあって、そのの何かが今でも動いているのではないか… などと思って、行ってみたそうだ。確かに、遺跡が今だに環境に影響を与えているという話はあるらしい。



死の森は果てが無いわけではなく、祖父はその途切れ目を見たことがあると言っていた。少し緑が戻ってきたあたりで、目の前にはまた森が広がっていたらしい。勿論そうなるとただ向こう側に出ただけということも考えられる。どちらにしろ祖父はさらに前にいくことは出来なかった。急に霧が深くなり、道に迷い、恐ろしい数の毒虫が出てきて、逃げ帰ったという話だ。

その日、ピニオンは退屈していた。

こう言うては何だが、ピニオンは弓の腕はともかく、獵師としては祖父より成績がいい。

とけ込むのがうまいというか、無害っぽく見えるというか：

警戒心を抱きにくいのである。

そのおかげか、長い間身を潜めなくても、獲物に気付いたらそつと身をかがめて、慣れで矢を放つ。それだけで獲物を取れてしまう。当たれと集中することもない。余計な力は全く入れない。ただそこに、射るべきものを見つけたから、狩る。

あまりにも自然すぎて警戒が出来ないのだ。

殺気を撒かずに獲物を仕留める。この凄さに当の本人は気付いていないのだが、その才能のせいもあって、それなりにピニオンは生活に余裕があった。

そんなこともあつてか。

森の奥に入ってみようと思いついた。

実は前々から下準備はしてあった。

今日は晴れに晴れている。雲ひとつない。

自作した虫除けのこう葉を使い始めてから、刺されたことは無い。なにより、人は自分で体験してみないことには、納得しないとい

うことは多い。ピニオンもその例に漏れなかった。

狩りの準備はいつだって出来ている。気持ち多めに持ったら準備完了である。

彼を動かすのは、祖父のような物欲ではない。冒険家の中にあるもの。その中から名誉欲を取り除いた：

いくなれば、好奇心。

木々が段々に枯れて折り重なり、道を塞いでいるあたりは、これも暇な時にこつこつと取り除いておいた。そのおかげで、3時間もしないうちに、祖父が言っていた『緑の戻ってくるあたり』にっていた。

毒虫にも遭わない。祖父はその時『急に霧が深くなった』と言っていたが、ここまで晴れ渡っているとその気配さえない。緑は戻ってくるに留まらずどんどん濃くなり、鬱蒼としてきた。ここまで深いとさすがに霧が出てきてもおかしくは無いのだが、空気が湿つてはいても霧は出てこなかった。

一時間半も歩くと、今度は普通の森に戻った。

入り口あたりに広がっているのと変わらない、豊かな森だ。人の手が入っていないので、獲物はさらに多いだろう。夏になったら何度かキャンプに来て、多めに狩っておくと冬の蓄えが楽になるだろう。

.

？

なんだろう。

ピニオンは、気配？ …を、感じたような気がした。

…気のせいだろうか。

( )

…つまただ。

水の波紋を見ているような、気配が広がって…でも、力を失っていくような、また元の泉に戻るのを見ているような。

( . )

…どこからだろう。

なんとなく、さらに奥のような気がした。

その方角には、ひと際大きな木が見えた。

さっきまで歩いていた、鬱蒼とした部分、そしてその間にある枯れた木々の折り重なる場所。それに邪魔されていたのだろう。今の森からなら十分に目立つ大樹だが、入り口に広がる森あたりからではこの木は見えない。

ピニオンは、その大樹を目指して、さらに森の奥へと入っていった。

## 群生大樹

( (・) )

…その気配だけが膨らむ、波動のような物は、だんだんはつきりとしてきたように思った。

森の様子はいつそう鬱蒼としてくる。

何より…

今まで見えていた地面が見えない。

木の根や、競うように生える… 実際競っているのだろうが、草花に覆いつくされた森は、もう魔境と呼んだほうがふさわしい様相を示してきた。幹なのか根なのか分からない、天然の檻か柵のような木々の延長。所々に溜まっている水が、地面があるならばこの筈である高さを示すのみだ。

「何なんだろう…ここ」

熱帯地方の植物があること自体は珍しくもない。が、基本的に冬をきちんと迎えるこの地方では、ここまでの場所に自然になるというのは考えにくくもある。

だが、確かに暑い。

ここだけ年中この温度だというのなら、こんな所に魔境が出来ているというのも頷けるが、すると、祖父の言っていたことは正しかったのかもしれない。環境を変えてしまうような力を持つ古代遺跡が残っていたなら。そしてその歪みのせいで周りの木々が生命力を奪われたとかなら？

死の森の説明がついてしまうのだ。

（ （ ・ ） ）

「！ ……うわ…」

開けた場所に出た。

今までの水溜り程度の水源や、水の腐りきった沼のような物とは違う、生命の女神の祝福を受けたような美しい湖。町一つくらいありそうな水鏡の中心に、さっき目印にした、『ひと際大きい木』があった。

神秘的な光景に感嘆する。

…それはいいのだが。

「……参ったなあ。しかたないか」

ここまで離れていると、泳いで行くほかない。つたわれる木が無いのだ。

代えの服くらいはある。…が、誰がいるわけでもない。ピニオンは服を脱ぎ、裸で湖につきり、泳ぎ始める。

…気持ちいい。

熱帯の森とそれにふさわしい蒸し暑さの中にいたため、この清涼感は格別だ。

近づく間に思い出した。あれは、あの木は…

ガジュマルだ。バンヤンとも言ったか。

祖父が珍しいと面白がつて育てていた、木に絡みつく木。『絞め殺しの木』などとも呼ばれ、太く長く絡みつくうちに絡み付いていたモノを埋め尽くしてしまうためにそう呼ばれる。熱帯の植物らし

い遅し過ぎる樹木だ。

そのガジュマルにガジュマルが複雑に絡みつき、それぞれが日の光を奪い合い、寄り集まってまるで大樹のようになっているのだ。

「…すごい」

冒険家ならこの光景そのものが宝物で大発見だろう。またここまでの物があるなら、古代ロストテクノロジー系の遺跡か、その系統の魔導機器の存在は確信してよさそうだ。普通の人間でも、なんとなくその辺のことは分かるし、その発見者としての功績はうやむやでも、領主や王に知らせれば、褒美が期待できるのは判る。

ピニオンも当然分かる。が。

なんとなく、言いたくないと思った。誰にも知られたくない。

ここは、気持ちいい。

ピニオンは多少退屈に感じながらも、現状の暮らしにある程度満足していた。

猟師としてずっとあの森で暮らすつもりでいたし、これからもそうしたかった。

そして、こんな素敵な場所を見つけたのだ。

ほぼ確信に近いが、ここは冬でもこの感じなんじゃないだろうか。もしここで暮らせる算段が付けれるなら、冬の間ここにいたっていい。火を使って暖を取らなくていいなら、薪割りはほとんどなくてすむ。したらしたで売ればお金になる。ここで出来る仕事だっていくつか思いつくし、それで余裕がさらに出来れば、祖父がいた頃は忙しくて中途半端になっていた読み書きとか勉強できないだろうか。常々本という物を読めるようになりたいと思っていた。

…思考していく中で、ピニオンは気付いた。

自分は現状で満足などしていない。やりたいことがこれだけ出て

くるのだから。

ただ、それは、この場所を見つけた今、この場所を独占した上で  
のことだ。

ここを誰かの物になんかしたくない。共有だってまっぴらだ。褒美や名誉がどれだけの物か知らないが、絶対にここの価値以上の物ではない。

(…こんなに心が沸き立つのはいつ以来だろう)

…そんなことを考えていたら、ガジュマルの大樹の根の一本に手がつく。

裸なのもあり、擦り傷を作らないように気をつけながら、水から上がって、木に登る。複雑に絡まっているだけにとっかかりも多く、とても登りやすい。

$$(((((\cdot))))))$$

……今迄で一番強い波紋を感じた。

存在感そのものが広がるといふ感じも、よりはつきりと。

足を止め見渡すと、そこには空洞があった。

ガジュマルの木の表面にいられない部分は、枯れてしまう。中が空洞なのも別におかしくは無い。

複雑に絡み合う中で、表面に出ている部分もある木が、内部にも幹を張り巡らせている。

ピニオンはそこから、群生大樹となったガジュマルの中に入り込んだ。

## 琥珀の中のコハク

ガジュマルの群生大樹の中はかなり不思議な空間だった。枝や幹が好き勝手にからみついて、滅茶苦茶になっている。さながら天然の迷路である。

ピニオンが入る隙間くらいは十分にあるので、出られなくなるほど複雑でもないだろうが、内部の全体を把握しにくい。

外からの見た限りでは、少し大きめの家がすっぽり入る程度の広さがあつたし、高さは… 見当がつかない。

しばらく道なりに進むうちに、あることに気付く。

真ん中に、大黒柱のように、支えとなるガジュマルがある。

これもいくつものガジュマルが寄り集まって一本の柱を形成している。

( (・) )

また、『波紋』が来る。上から感じた。

柱にそって見上げると、少し上のほうで、先っぽが広がるようになっていた。花を茎にそって下から見上げる感じに似ている。気のせいか、てっぺんが明るい気がする。今までと同じように、慎重に上に向かう。せめて代えの下着だけでも持っていれば良かった。全裸で木登りというのも大概だが、内部に入っていくとなるとさらに心許無い。

ピニオンは、その柱の先に登り上げ、

「……あ」

文字通り二の句が告げなかった。そこにあつたのは、あめ色の岩。



さつき、この柱を茎と例えたが、ならばこの岩はつばみだらうか。茎の大きさからすると小さく見えるが、その存在感は尋常ではない。

これは、琥珀だ。

気泡の全く入っていない、卵を立てたような形の琥珀。

しかも。

その中には、少女の姿がある。

( )

琥珀の中に虫などが入る事はある。琥珀は樹液が化石になった物だ。その過程で入ってしまうのだ。

しかしこれはありえない。ここまで巨大な……人一人入って化石となるなど。

ピニオンで二抱えの大きさ。

価値は、計り知れない。

琥珀の中の少女は、少女と評したとおり、ピニオンとあまりかわらない年頃に見える。

衣服は着ていないが、ガジュマルが入り込んでいて、その枝や葉が少女の肌を覆い隠し、守っているように見える。

見えているのは胸元から上と足の一部……腿のあたり。そして腹部。

肌の色は、琥珀のあめ色のせいで分かりにくいだが、色素が薄いのは見てわかる。腰まである髪も同様、黒や赤ではないだろうが、金か銀か……白でもおかしくない。

瞳は閉じられ、微動だにしない。当たり前だが。

少女に絡みつくガジュマルは柱に繋がっている様だった。

これはまさに極めつけの宝物だった。

交渉の仕方や相手さえ間違えなければ、死ぬまで遊んで暮らせるだろう。

が…

ピニオンは、その考えは全くなかった。それどころか、その形で価値を思いつきもしていない。

ピニオンの頭の中は、この少女のことだけになっていた。

(…なんて、きれいなんだろう)

閉じた瞳とはいえ、整った顔立ちや、華奢な身体。波打って輝く髪。大樹の内部だというのに、それがはつきりわかる。

今さらだがピニオンは気付いた。この琥珀自体が、発光しているのだ。

淡い光をかもしたしながら、あめ色の宝石の中で眠る少女。

琥珀の出来方になぞらえて考えれば、この少女は生きているはずがない。

しかし、ピニオンは、この少女が死んでいるとは思えなかった。むしろ生きているのは確実なのだけど、どうやって生きていられるのか不思議という形だった。

だって、生きてる。

ピニオンは猟師という生き方で糊口を凌いでいるからか、死というものはかなり身近だ。獲物は絞めてから村に持っていく。自分で殺すのだ。

血が通わなくなった生き物は、餌を必要としないかわりに、時間に応じて質が落ちていく。それは死んだ瞬間から始まり、どんどん進む。命とは、保たせている間をいうのだ。生き返るなどという事

がありえない以上、保たれなくなった物は、醜く崩れ、腐り落ちて、やがて土に帰る。

老いでさえそうだとピニオンは考えていた。

保つことを諦めたり、止めたりしたときに、身体そのものの機能が、ゆっくりと停止に向かう。その細胞の連続した死や機能低下が刻まれてゆき、その生命力の枯渇の様子が死滅と重なり醜く映る。

これは思想ではない。獵師として生きてきた中での実感のような物。ピニオン自身脳内で言語化がなされているわけではない。

これになぞらえると目の前の少女は、絶対に生きている。琥珀に包まれ微動だにしないにもかかわらず、生命力に満ち溢れていた。淡く発光する琥珀そのものと、それに応えるようにきらめく髪。

人形のようなと形容しそうな整った顔立ちだが、それをそのまま使ったのなら、その批評家は、語彙の無さか美感覚の浅さをさらけ出すことになる。その肌のなめらかさときめ細かさの中にある、目に見えるやわらかさ、質感を見抜けていないことになるのだから。

（きれいだ。本当にきれいだ。僕が今まで見てきたどんな物より）

森の中で生きていれば、美しい物はいくつもある。琥珀も他の物を見てきた。青く光る燐粉を振りまく蝶。輝かんばかりの扇のような羽を持つ鳥。夏の夜に淡く光る虫たちの群れ。雷鳴や鬼火。赤く染まる葉、凍る滝、広さはかなわないにしても、鏡のような澄んだ湖や泉。

その中の何一つ、彼女の足元にも及ばない。

（こんなにきれいな女の子が、生き物が、存在が… …！！）

ピニオンは唐突に理解した。

ここは、この大樹は、この湖は、この森は、あの熱帯の森も死の森も自分のいた狩場の森も、すべて彼女が中心なのだ。

そんなことに気付くと、今度は彼女自身に心を奪われて止まっていた思考から、当然の疑問が浮かび上がってくる。

どうしてここにいるのか、いったい誰なのか、これは彼女自身が望んだ事なのか、それともここに閉じ込められているのか？

どのみち彼女に関することばかりなのだが、今はどうにも出来ない。

彼女は琥珀の中なのだ。答えは貰えまい。

…どれくらいそのまま、彼女の事を考えていたのだろう。

僅かに差し込む外の光が、このこと同じあめ色になっていた。  
日が暮れかけて、角度が変わったせいで、差し込むようになった  
のだろう。

( (・) )

『波紋』が来る。

そういえばこの波動は、法則性が無いようだ。彼女が、もしくはこの琥珀が出しているのはほぼ確実なのだけど、弱かったり強かったり、小刻みに出るかと思えば、しばらく静かだったり。

ただ、とても心地いい。彼女だと知ってから特には、だ。  
まるで、彼女自身が広がってゆくような、存在感の膨張。

誰しも、気になる異性は、存在そのものが祝福だ。  
姿、香り、声。それを感じるのに近い、六つ目の感覚での邂逅。

(・)

ふと、思った。

名は、何というのだろうか？

もちろんあるだろうが、それを知る手段も無い。

だが…

呼びかけてみたいと思った。

名前というのは呼ばれるほうにも勿論あるが、呼んでいる方にもある。自分がこの先改名しようと、ピニオンという孫といた祖父にとってはピニオンなままだろう。

村にいる知り合い達だって、ピニオン自身が改名したことを知っていたても、相手が知らねば意味が無い。そのことを知るまでは、あの森の獵師の少年はピニオンなのだ。

ならば。

いつになるか判らないが、本当の名前を知る時まで、仮の名で呼んでもいいだろう。

応えてくれるわけでもないのだが、なぜかそのことをむなしとは感じなかった。

(・)

…さて、どんな名で呼ぼう。勝手に呼ぶわけだから、考えるのはピニオン自身だ。

ガジュマル関連の言葉、湖関係の言葉、森関係の言葉… いくつも出ては来るが、名に相応しい響きのものから難しい。ピニオン自身、学があるわけではないので、語彙も少ない。森の妖精や豊穡の女神は、逆に良すぎて使われすぎている。彼女に十把ひとからげな名は似合わない。

琥珀関連で思い出し始めると、多少はマシなのがあった。

が、アンバー、コープル、ベルンと、どちらかというとき勇ましかったり、音が濁っていたり、イメージに合わない。もっと柔らかい響きで、しっとりとした、それでいて彼女だけの… そういう名前は無いだろうか。

とはいえ思いつかないものは思いつかない。そのまま暫らく苦悶していた。

… 所謂いえば祖父も琥珀を持っていた。遺跡の話でもそうだったがなかなか業の深い… といっても悪事を働くような人間ではなかったが、欲みれの人だったのは確かである。自分が背筋を伸ばせねえなら、どんな楽しいこともつまんねえもんだと、健康に気を使う老人だった。琥珀は東の方では『コハク』といい、薬として使うこともあるとか言って、酒に少し漬けておいていた。

(！)

そうだ。『コハク』はどうだろう。響きも濁りが無くて、しっとりとしている。東方の呼び名だというから、音も珍しい。

うん。とても似合う。コハク。これはいいんじゃないだろうか。

『コハク』

( ( (・) ) )

ひと際大きな『波紋』が来た。

こころなしか、琥珀の輝きが増しているような気がする。

… 所謂いえば、すでに日は暮れかけているのだ。早く戻らないと、今日中に小屋に着けない。

「そろそろ行くよ。『コハク』」

答えが返るわけでもないのに、と思いつつも、呼びかけたい誘惑に勝てずに、そう言った。

弱い『波紋』だった。間隔も小さい。

「また明日、来るね。『コハク』」

（ ） ・ （ ） （ ）

「!？」

今までの物と比べてもかなり強い波動が来た。

「とと…」

もう一度だけ『コハク』に振り返る。彼女は、文字通り輝いていた。

彼女をギリギリまで視界に入れつつ、ガジュマルの迷宮を降っていった。

…半日ここにいて、改めて気付く。

自分が生まれたままの姿だった事。  
思わず赤面する。

どうせ見られるわけでもないが…

なんとなく。

## 『ナイラ』の女と傭兵剣士

コハクと出会ってから、五ヶ月強の月日が流れていた。

行くのと戻るのを合わせて半日かかる所に通えば、当然狩りという本業が成り立たない。

そこで、2、3日泊り込む形にして、湖の周辺の森の方で狩りをする事が多くなった。

( ) ( ) ( ) ( ) ( )

彼女の波動は、日に日に強くなっていつている気がした。  
まるで、麻薬だ。

しかも身体に悪い影響はない。

あるとすれば。

その依存性による彼の社会性の崩壊の懸念くらいだろうか。

(・)

「ピニオン！」

獲物を卸すなり、明日の準備のため、さっさと戻ろうとするピニオンに、この店の主人の娘が声をかけてきた。

主人の遺伝子は内面しか授からなかったようで、背の低い、小リスのような女の子。かわりに受け継いだ方は深刻(?)で、かなり気が強い。ピニオンより一つ年上だが、ピニオンは自分より背の低い同世代の知り合いは彼女しかない。



「ラシイ。何？」

「何って… もう少しゆっくりしていったっていいじゃない。どうしてそんな急いで帰っちゃうの？」

無駄な時間を過ごしたくないからだった。

一刻も早く彼女に会いに行きたい。

が、その態度のせいで勘繰られて、万が一にでも彼女の事を知られるのは嫌だった。

「ちょっとね。いい狩場を見つけたから、そこに行くのが面白くてでもそうだな。ちょっと夢中になりすぎてたかも」

言いたくない事があつて、それを悟らせないためには、今の行動と矛盾しない事を言わないといけない。

隠し事をするなら、半分くらいは本当のことを混ぜて話すと、それらしい話に聞こえる。

「ここんところ、そういう事が多いと思つたら、そんな理由？ そりゃあ、こつちも商売だし、この半年くらい、貴方の持つてくる獲物が妙に質がいいのには気付いてたけど… せつかく町に卸に来た時くらい、御得意様に愛想振りまいてもバチは当たらないと思うけどなあ」

ブラッシカはこのところのピニオンのつれない態度が気に入らないようである。

ここはピニオンのすむプロフから一番近い町、レイゲン。

獲物の殆どはプロフ村で引き取ってもらうが、道具の買い替えや特殊な薬などの消耗品などを月1で買い足すので、その時には直接

ここに卸しに行く。

ちよつとした宿場町、というだけなので、たいした規模でもないが、一通りの物はそろえられるし、巡回の見世物や季節ごとの祭、遊技場などもある。

で、よろず取り扱いのラパ商店のブラッシカ。ここの看板娘だ。微妙に雄々しく聞こえる自分の名前がキライらしく、会う人会う人に『ラシイと呼べ』と言って回る娘である。

ピニオンにしてみれば、生命力が強い割に、素朴でかわいらしい花と同じその名は、こまごまと良く働き、元気で明るい彼女によく合っていると思う。

しかしそれなら確かななおの事、その雄々しい響きは合っていない。

ので、ピニオンは要望どおり、いつも『ラシイ』と呼ぶ。そしたらやたら懐かれた。

よく、『あれだけ頼んでるのに誰もそう呼んでくれないのよ!? 理不尽だわ!』と、愚痴をこぼす。

…実はピニオンは解る気がしていた。

彼女はなんだかんだで商売人の娘だ。愛嬌を振りまく事の大切さを知っている。白々しくならないようにしながらも、お世辞も言うし、愛想笑いもする。

だが、こと名前に関してはムキになる。

そしてそれは、お手軽に見れる彼女の『本音』だ。

怒った顔がまた可愛く、次の日には気にした様子もないとなれば、男は挨拶代わりに嫌がる本名を呼びたがるのは当然だった。

しかし、素直に要望に応えるピニオンに好意を持つということは、

気にしてないようで随分気にしているのだろう。

「それでね、言ってやったのよ。なんであたしみたいな小娘が、先輩のアンタに商売のイロハの講義をしなきゃなんねーですかーって……」

もうお茶は4杯目である。

半分も飲まないうちに注ぎ足すのは、『まだ当分話を終わらせるつもりはない』というサインだ。

無意識の。

ラパ商店の他にも立ち寄る所はあるし、このままだと今日中にコハクの所に着くのは無理だろう。

それでも、嫌な顔も、聞いているふりでやり過ごす事もせず、きちんと相槌をうちながら、共感できる所はそう言い、意見は否定せず包み込む。

実はピニオンのファンは、プロフ村、レイゲンの町をあわせて数十人いる。

聞き上手の人間というのは好かれるものだ。

もっともこの半年、コハクの所に通いつめたせいで、交流の薄れた知り合いが多くなってしまったが。

2時間もブラッシカの話の聞くと、彼女はようやく満足したよう

で、お茶でたぶたぶのお腹をかかえて、ピニオンはラパ商店を後にする。

殆ど入れ替わりに、旅の者らしき一組の男女が店に入ってくる。

「いらっしやいませー」

…と。

ブラッシカは態度には出さず驚く。

『ナイラ』だ。

ブラッシカが子供の頃の異国の出来事。西の方のカーリュツフ公国の、砂漠の中にある都市、呼水都市タオザデイトで、数百年続いた水が急に枯れ、都市は滅んだ。

その都市の先住民といわれる、金色の目をした蒼髪一族が『ナイラ』である。

今では一族ごと自治区を持って、閉鎖的な暮らしをしているが、混血も多少進んでいて、純血の人間もたまに自治区から出てきているという。

最近タオザデイトの水が復活したという噂もあるがこちらは眉唾だ。

まあ、珍しい客というだけで、問題はないのだが。

ブラッシカは気付かれないように、なんとなく目で追う。単に物珍しさだ。

一目で解ったとおり、純血のようだ。ナイラの血は割と強く出るといわれるので解りやすいが、目の金色も、髪の色も、混じり気がない。

わざとなのか、少し雑にも見える髪の手切り方だが、本人の目の大きさ、活動的そうな雰囲気とあいまって、かわいらしく、似合っ

いる。

反面その服装は、柔らかく広がるスカートと、固めの布に補強をした、前後左右にある十字の紋章の草ずり、護符などを入れるのだろう、色分けして重ねた胸当てと、魔導士然としている。魔導士をひ弱なイメージに見ているブラツシカには、雰囲気重ならない格好に思えた。

だが、カラス口くちのような変な握りの杖の先には、大人の握り拳ほどもある、真紅の宝玉がついていた。その、炎が揺らめくような輝きの真球の、神秘的とも禍々しさともとれるオーラは、彼女が確かに、魔導士であることを物語っている。

「…ラト。何を買うの？」

「ああ。ま、色々だよ。たしか反応は、北にあった森の方なんだろう？ それなりに準備が要るさ」

一緒にいるのは、短く切った金髪の、傭兵風の剣士の男。急所のみを覆うレザーアーマーに、小手や具足だけ金属を使っている。

三白眼で、背も高く、一目見れば威圧的かもしれないが、なんだろう。物腰とか視線が柔らかい。

一目見てピンときた。恋人同士だ。きよろきよろとしていて、警戒心のなさそうなナイラの女性。ゆつくりと品定めしながらも、常に彼女を気にしている剣士。

「あ、ねえねえ。この虫除けクリームどうかな。けっこういい匂い」  
「虫除けがいい匂いでどうするんだよサリア姉ねえ」

姉と弟！？ …全く似ていない。

「えー。でもそんなら虫除けとして売ってるわけじゃない」

…あ。それは。

「…ん？ …これはハーブか。まあ羽虫程度ならな。足元に別のを

塗るなら使えるか。いいよ、買っても」

「やった。へへー、ありがと」

気付いた。…しかしそれにしても、恋人にしか見えない。

結局、その虫除けと、別の虫除けと一緒に、後は保存食を買っていった。

さっきの会話で、少しだけ気になる部分があった。

『たしか反応は、北にあった森の方なんだろう？』

なんの反応だろう。魔術的な話だろうけど、見当はつかない。

ただ、北の森は、ピニオンが狩場になっている所だ。

さっきの二人の雰囲気には、殺伐とした感じは微塵もない。

でも、彼と何か関係する事なのか…

一応、ピニオンに知らせておこうかと思ったが、日が暮れかけてこれからお客が増える時間帯だ。店をぬけられない。

知らせることは、出来なかった。

## 魔石使い

( ( . ) )

その日のうちにコハクのガジュマルに無理矢理帰ったピニオンは、その二人組を見ていなかった。

サリアというナイラの女と、ラトと呼ばれた傭兵風剣士。彼らもプロフの村まで来て、そこで宿を取っていた。

村で一番大きな家の二階。客室なのだろうが、殆どベッドだけの部屋だ。

もちろんベッドで寝れるだけでありがたくはある。

そこでサリアは逆枕で寝そべって食休みを取り、ラトはその横で壁にもたれて足を伸ばしていた。

「だいたい、町で集めたのと同じ情報ね。森の奥に行くほど、真っ白に枯れた木々が折り重なって、進めなくなってる。周りが十分豊かな森なので、わざわざ入る者はめったにいない…」と

「その、ピニオンという猟師の少年に話が聞けるとよかったけどな。最近森に入り浸りらしくて、あまり村の方にはいないらしい」

北にある森は広大である。案内役は欲しいところだ。

「まあ、大丈夫よ。探し物の方が呼んでるみたいなものだしね。見つからないってことだけはないわ」  
「確かにな」

村の中なぞに宿屋が必ずあるとは限らない。むしろなくて当たり

前である。

定期的に人を呼ぶ何かがないなら、商売として成立しない。それでも滞在する場合、軒先を貸してもらって、野宿するなど、方法は色々あるが、とりあえずは村の顔役に話を付けねばいい。

外からの客に対応するのは役目の一つだし、そのまま泊めてくれる事もあれば、いくらか要求される事もある。

ここでは後者であつたが、その分のもてなしはしてくれた。

ピニオンの話題はそのままなしの内、メインのキジ肉の話から出た。

腕のいい獵師の少年で、森の奥に住んでいるとのこと。

彼のいる小屋までも、慣れない者は半日以上かかるという。最近は、いつもいる時間に訪ねてもいないことが多いが、顔はそれなりに見せに来るらしい。

彼に会うまで待つてもよかったが、反応の正体が掴めていない以上、のん気には構えていられない。

数ヶ月続いている反応がいきなり消えるのも変ではあるし、考えすぎかもしれないが。

・

森は、クヌギやカシなどが主な木で、キノコなども多い。クヌギの実はようはドングリであり、小動物の主な食べ物だ。

それがこの密度で植わっているという事は、成程豊かな森に違いない。わざわざ奥に行かないのも頷けた。

さらに奥に向かって、聞いたとおりの折り重なった木々がある。

どこまで続くのか解らない、枯れきった真つ白な木々。本当に邪魔だ。

が。



「ただの木ね。OK」

「熱は<sup>キャロル</sup>どうするんだ？」

「これ」

サリアは、いつの間に集めたのか、大量のドングリを袋に入れていた。

「これだけあれば、『食べ』なくても大丈夫よ」  
「左様ですか」

サリアは杖を掲げた。

カラス口<sup>くち</sup>のような柄の部分を伝って、赤く輝く、粘り気のある何かが地面にゆつくりと広がる。まるで先についている、真紅の宝玉が溶け出したかのようなだ。

その真つ赤なハチミツだまりの上に、ドングリをぶちまける。

ドングリは、ルビー色のハチミツのような物に触れたそばから溶けて消えていく。その度に、杖の先の宝玉ごと、ルビーのハチミツは輝きを増した。

この宝玉の名称は『ツエナ』。

ナイラの才ある者が使う事のできる、一族にとって重要な石。

「どうだ？ サリア姉<sup>ねえ</sup>」

「ダメ。一回じゃ無理。とりあえずつかんだとこまで退けるわ」

その瞬間。

ズズズズズズズズズズズズズズズズッ！！！！！！

折り重なった木々が、まるで意思を持ったように左右に分かれ、目の前に道を作った。

「おし」

「…相変わらずスゲエよほんと」

ピニオンはぬけられる隙間を数年かけてこつこつ空けたというのに、彼女は一瞬で『道』を作ってしまった。

『彼女』は、サリアハハサハ。

カルファト卿が息子であるラトと共にこの地に派遣した、ナイラの魔導士。自治区に籍をおかぬにもかかわらず、絶大な才を持つ操者… 高位の『魔石使い』なのである。

## 聖域での出会い

「うわぁー！！ すっごい！！ ねえラトこれ凄くない！？」

「…… ああ。これは凄いわ。大樹というより塔みたいだ。植物系の遺跡… ロストテクノロジー 環境操作系の遺物… いや、決め付けるのも危険か」

( ・ )

「！ 反応あった！ あの大樹の中よやっぱり！」

「… まあ上の方だろうと下の方だろうと、アレを無視して存在していると考えるににくいしな」

コハクのカジユマルを見つけたラトとサリアは、互いに驚いていた。

遺跡というより忘れられた聖域といった風情のこの空間は、サリアをおおいにはしゃがせた。

対するラトも、この雰囲気は久しぶりであった。

「ここまでの場所が、手付かずとはね」

村で手に入った情報とは違い、明らかに狂った生態系があるにもかかわらず、割とすんなりここまで来てしまった。折り重なる木々はともかく、霧もまったく出てこなかったし、大量の毒虫も見えない。

日の出とともに出てきてもう夕方だが、無理すれば一日で着ける様な距離だ。秘境とは言えない。

「… 『反応』は、半年前からだとグウィンが言っていた。なら、その時同時に遺跡の防衛機構が解除されたのかもな」

「うー、もう夕方なのが悔しいなあ。…まだ寒くもないし、いいかな？　ねえラト、泳いでもいい？」

「…このステキ空間の虜になってるなサリア姉<sup>ねえ</sup>…　まあいいさ。魔力は感じないんだろう？　毒がなければ俺だつて入りたい。魔石<sup>ツェナ</sup>の熱<sup>キヤロル</sup>の無駄遣いもしたくないしな」

「やた」

簡単に作りたいかだに荷物を載せて引っぱり、向こうで着替える事にする。

「ひゃー！　気持ちいい！　透明度高いし、凄いきれい。やっぱり環境操作系なのかな。だったら楽な仕事かもね。防衛機構が沈黙してるんなら、戦闘もないかも」

「油断はしないでくれよ。内部とは命令系統が違うなんてよくある話なんだから」

「でもでも、何の危険もないって判ったら、ここでしばらくバカンスとかも良くない？　こんないい所だし、ね？」

「あんなあ…」

「思ったより早く終わったら、でいいよ。遺跡を見つけるのにだつて、数週間かかるかもって思ってたのに一日で着いたし…」

必要経費とお小遣いの区別のないダメ研究員の典型である。一人で仕事をする時や、ラト以外と組む時は模範生なのに、甘えられる相手となると途端にネジが緩む。

「ねーねー。ねえってばあ。一週間でいいからさあー」

言い出したら聞かないのは解っている。なぜならラトはサリアの押しに勝てた事がない。出来るのはせいぜい妥協させる事だけだ。

「…内部の調査も滞りなく終わったら、3日だけ」

「うんうん　それで我慢する」

何日くらい休みたい？ と、最初から希望を聞いたところで、サリアは『じゃあ3日』と答えたろう。ラトが、『サリアに妥協をさせた』という形だけはとりたがっているのを、サリアは知っているのだ。そして、それがばれているのもラトは知っている。

互いに優秀ではあるが、二人そろって並程度の実績なのにはこの辺に問題があった。

しかし、カルファト卿の研究室に実績を持つ人間自体数えられる上、息子の希望を跳ね除けられるほど強くは出られない程度には卿自身親バカであった。

(・)(・)

空洞になっっている群生大樹の内部に、いくつもの枝に支えられるようにして、中心を通る台座のような木が生えている。  
その先には、琥珀の中で、ガジュマルの枝葉に包まれているコハクの姿があった。

「……………！！！！！！」

二人はそろって目を丸くした。

「…何時だかのサリア姉ねえに負けねえ神秘性だな、これは」

「……！やだもう何言ってるのよ馬鹿！」

「いやマジで。この聖域みたいな場所の中心で、琥珀の中で眠る美少女だぜ？」

「彼女の神秘性の否定はしてないわよ！！！」

恋人の心の中でこんなきれいな物と同じ分類にされているのかと思っただけが沸騰したのだが、天然なのかからかいもしてこない。

そばにただで心臓を優しくかき回されているような気分になり、

「さ、さっさと調べちゃいましょ！ー！」  
仕事熱心なふりで距離を開ける。

しかし見れば見るほど美しい。

少し間違えると触手に絡みつかれた魔物の卵なのだが… 実際遠目に見たときはそう見えて随分警戒したが… 彼女の生命力と、波動を感じていると、邪な者ではないのがわかる。少なくとも魔石を通じて、サリアはそう感じた。『そう感じる』としか言いようがない。

キズをつけていいのかどうか迷ったが、木からならいいだろう。

「…サリア姉<sup>ねえ</sup>。すまん」

「？ 何…！」

サリアが振り向くと、ラトは獵師らしき少年に捕まって、ナイフを突きつけられていた。

## 解き放つために

「動かないでください」

言葉は敬語だが、その声音は硬い。ピニオンは彼らがここまで来るまで気付かなかった事を自己嫌悪していた。

この場所どころか、森の奥に入ろうとする人間自体自分以外いなかったたので、油断していたのだ。

だが、彼女の事を思うなら、それなりの仕掛けや警戒網をはっておくべきだった。ここまで進入を許してしまった後では何もかも遅い。

「キミが、この森で獵師をしている、ピニオンだな？　なるほど、

ここはすでにキミが見つけていたってことか」

「しゃべっていいって言うてませんよ。質問は僕がします」

彼らしからぬ鋭い目。断じるセリフ。彼らのペースにならないように、気を張っている。

得意とはいえないのだ。こんなことは。しかし、他人に見つかったというこの現状では、この二人の始末も含めて、覚悟を決めないといけない。

サリアも杖を正面に構え、人質にとられたラトと、脅すピニオンから目を逸らさない。

「嘘だと感じたら即座に首をかき切ります。僕が理解できるように努力してしゃべってください。『あ、今肝心な部分を言わずにおいたな』と感じても同じようにしますから」

最初の質問だ。

「あなたたちは何者ですか」

「…俺が答えていいか」

「どうぞ」

「カーリユツフ王国国立の大学院、カーリマンズ学院は知っているか？」

ピニオンは知らないが、そこから来たのなら研究員ということは判る。

「元々考古学の権威であったトルク＝フォマが、呼水都市タオザデイトにて230年ぶりに第3封印の門の謎を解いて、今まで読めなかった27の言葉の翻訳が出来た。その功績で王家の覚えを良くした彼と、タオザデイトに縁の深いカルファト家の4女が結ばれた。後ろ盾を得た彼は、そのまま国内でもトップのカーリマンズ学院で教授となり、近辺の遺跡の調査を主として活動している。

俺と彼女はそこで研究員として働いていて、遺跡の下見を主にやっている。

俺がラト＝カルファト。彼女がサリア＝ハサハ。

さて……

ここまでで質問はあるか？」

そう聞かれて、何を聞こうかと一瞬考えの方に意識を逸らした。その瞬間。

「あがぁあつ!？」

気がつくと、ピニオンの手に赤く透明な糸が絡み付いていた。ただの糸ではない。まったく動けない。力を入れようにも、全く遊べない。



「……!?!」

見れば、ピニオンはその糸で完全に拘束されていた。ナイフが落とされ、乾いた音を立てる。首から上以外はびくとも動かない。ラトはするりとピニオンの腕から抜け出す。

( (・) )

サリアは反応を感じてコハクを振り返る。反応だけなのを確認すると、またピニオンに向き直る。

「ま、こんな事はしたくないけど、こっちも人質をとられて心穏やかでいられるわけもないしね。悪いけど、立場は逆にさせてもらうわ」

齒噛みするピニオンだが、どうにもならない。今まで常に狩る側だったのが良くない。自分より知恵や場数のある人間は、いくらなんでも相手が悪い。今、自分がどうやって拘束されたかさえわからない。

これまでか。

「…彼女に、手を出すな……!!」

「ま、この状況じゃ、宥めてみても聞き入れてはくれないでしょうから、そこでじっとしてて」

そういつと、ラトと呼ばれた剣士と一緒に、サリアという女もコハクの方に近づく。

「…サンキュ。わりい、手間かけた」

「大丈夫？ 首筋、押し当てられてたみたいだけど……」

「問題ないよ。引き続き調べてみてくれ」

「ええ」

サリアが手にする杖の、真紅の宝玉が輝き始める。カラス口ぐちのよ  
うな柄をつたって伸びる赤い水あめが、ガジュマルに突き刺さる。

⌈  
⋮  
?  
  
!  
!  
!  
!  
!⌋

ピニオンは、少し考えて、青ざめた。

あれは、どういう理屈か知らないが、今自分を拘束している系と同じ物だろう。この系の力は凄まじい。しかもそれをサリアは自在に操っている。

ガジュマルはコハクと繋がっている。そのガジュマルに突き刺せるといふ事は、あの糸は彼女に届いてしまう！

「やめろおおおおおつ！！！！！！！！殺す！絶対に殺してやる！彼女に触れるな！があっ……！！うがああああごぶ……」

糸が変化し、猿ぐつわになる。

「……うるさいなあ。集中させてよ。話も出来ない……」

$$(((\cdot)))$$

「ああ、こっちなんだかめんどくさい子っぱそう。…ふーん  
 やっぱ半年前なのね。これだけ微弱な波動を受け取れるって事は、  
 グウインとは同族なのかしら？」

「多分そうだろう。彼らは種族ごと隠れ住んでたし、幻ってわけでは

もないけど、こういう形で生き残つてとなると、これはこれで凄いな……」

微弱な波動??何を言ってるんだこの人たちは。今の爆発的な存在感の広がりどころが微弱なんだ。

そして、そんなことより気になったのは……

「……!!!……!!」

「? なあに?」

猿ぐつわが取れる。

「ぶはっ!!……生きてる、の? 彼女は……」

サリアとラトは顔を見合わせ、ラトが答える。

「結論から言うとして生きてる。と、思う。仮死状態だったということかな。半年前、俺の先輩にあたる研究員が、仲間の波動をとらえたらしくてね。彼の言うことには、生きてて、意識がないと、この波動は出ないらしい。つまり、逆説的に彼女は生きてる可能性が高い」「波動は僕だつてわかるさ。じゃあ、彼女は……コハクは……でも、どうやって?」

……波動が解る?

ぼそりとつぶやくと、ラトはそこで、一拍おいた。そしてぐるりと周囲を見回すと、ピニオンの問いにも一応の答えを返す。

「多分、この場所……この湖だけじゃなく、周りの熱帯雨林、白く枯れて折り重なった木々の続く死の森まで、の事だが……の、おか

げだろう。ここは古代遺跡じゃない。環境系の遺物も眠ロストテクノロジーってない。ましてや忘れられた聖域でもない」

その言葉を、サリアが継ぐ。

「きつと、この子は、事故でここに落つこちたのよ。そして…この森を、かえた。そうよね？」

コハクにまるで話しかけるように問う。

( )( )(・)( )( )

サリアが、少し顔をゆがめる。

「…ダメだわ。何だろう… 言語の違い？ でも、この反応は…グウィンが普通にしゃべってるんだし、うーん…」  
「話せないのか？」

「こっちの言う事に、大きく、または小さく反応してるってことは、多分、伝わってはいるのよ。…まあいいわ。色々やってみる。…そんなわけでさ、ピニオン君。この子は知り合いの同族かもしれないの。だから扱いには言われなくても注意してるの。危害をだなんてとんでもない。…勿論、信用してもらわないと始まらない話だけど。私たちは、その波動をおってここに来たの。何があるか、誰がいるのか知るために。そして、この状態の…琥珀の中にいる彼女に、ちゃんと生き返って欲しい。？ じゃない、なんていうのか… 意思疎通をしたいというか」

この状態をわざわざ表す言葉というのは難しそうだったが、ニユアンスはピニオンにも解った。

「僕も… コハクと話したい。この石の中から出てきて欲しい。あなたたちには、それが出来るってことか？ その、グウィンって誰だ？ 先輩って言ってたけど、種族？」

サリアが手こずってるのをみて、ラトはしばらく語ることにした。ここまでに自分達が知れたことと、彼女についてしている予想。

さて、どこから話そうか。

## 六番目の種族

「聖五種族は知っているよな？」

ラトの質問にピニオンは首肯する。

詳しくは覚えてないが、神が天使に似せて人を作った後、他の可能性を作るために誕生させた、人以外の『種族』。

人に近いようで、人ではない者達。

神は、『手』を与える事で、『種族』を作ったといわれている。

『猿』に『手』を与えて、『人』が生まれた。ヒューマン

『狼』に『手』を与えて、『人狼』が生まれた。ライカンスロープ

『豹』に『手』を与えて、『人猫』が生まれた。レッサーフェルプ

『兎』に『手』を与えて、『草原妖精』が生まれた。グラスランナー

『土竜』に『手』を与えて、『鋸小人』が生まれた。ドリフ

『樹木』に『手』を与えて、『森林妖精』が生まれた。エルフ

確か南の方に聖五種族が住む島国があるというが、大陸にもそれぞれ多少移住してきている。

国によって扱いは違うが、それでも人以下の扱いをする所は少ない。その行為そのものが、国の品位を貶めるという考え方が根底にある。

ピニオンが知るはその辺までだ。

「では、人でも、聖五種族でもない、『六番目の種族』の事は？」

！？

ピニオンは目を丸くした。

全く聞いた事がない。

「グウィン先輩ってのは、その『六番目の種族』なんだ。まあ、本人がそういったのは、人が人以外の種族を『聖五種族』と呼んでいるからであって、少なくとも古文書や文献にその記述があるわけじゃない。そもそも、『手』を与えられていないしな」  
「?????」

聖五種族は例外なく『手』を持っている。

「与えられていない…?」  
「というか、最初から持っていた。あえて聖五種族風に言うなら…」

「神は、『人』に『翼』を与えて、『フェザーfolk翼人』を生んだ」

という所かな」

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

それは…

「それってまるっきり…」

「まあ、『天使』にしか見えないよな」

六番目というより、最初の種族だったのではないかと考えるのは極自然である。

天使の記述は呆れるほどあるのだ。

「だけど、彼らは天使の伝承にあるような、神の使いとしての超常の力はない。今現在のエルフより少し上程度の魔力だ」

それは人を含めた七種族のうちで最高の魔力を持つということだが、伝承にある、海を割るだの自在に天気を変えるだの隕石を降らすだのと比べれば、確かに驚くほどの事でもない。

魔力はエルフより少ない人間だが、複数の術者による増幅魔術や、道具の力を借りる魔術、その他の補助によって、魔法をより使いこなしているのは人間だという見方もある。

「まあグウィン先輩の力しか判断材料はないけどな。空も飛べるし、伝承の方が大げさなだけって可能性は勿論ある。天使というのは彼らの事が間違っただけで伝わった物かもしれない。でも、伝承の天使とは関係なく、人知れずそういう種族が生まれてて、近年まで見つかっていなかったかもしれない」

確かに、可能性はどちらにもあるのだ。

「どっちの考え方も決め手にかける。グウィン先輩は、隠れ里の位置も知っているらしいけど、教えてくれない。で……話がここで戻ってくる。」

ともあれ、そういう種族がいるってのは解ったよな？ で、聖五種族がそれぞれいろんな特技があるように、『翼人』にも、いくつかの特徴や独自の能力がある。翼や強い魔力、飛行能力のほかにも、その中でも特異なのが『悟り』『悟られ』だ」

「『悟り』『悟られ』？」

ピニオンは言葉を聞いても、ピンとこなかった。

「これは俺も経験した。こっちの心を読み取り、自分の考えを他人に伝えるという能力だ」

「……………」

今度はよくわかった。具体的にどういう能力かはまだわからないが。

特定の人からだけ読むという使い方は出来るのか。

特定の人にだけ伝える事は出来るのか。

聞かないことも出来るのか、あるいは無造作に読み、伝えるのか。



どれ位の範囲なのか。範囲の加減はきくのか。

だが、人には持ち得ない特殊な能力なのは間違いない。

「で、グウィン先輩が言うには、『波動』は、呼びかけ……遠くの人に、『おーい』っていうのと同じだな。それなんだそうだ。つまり、『波動』は、『翼人』の能力の一つということさ」

確かに話がやっと戻ってきた。

コハクの出している『広がりを見せる存在感』は、まさに『波動』  
という呼び名がぴったりする。

これまでの話の流れで、ラトもサリアも、それが同じ物だと認識しているという事は、ピニオンにも解った。

つまり…

「じゃあ、コハクは……」

「そう、彼女は……」

$$\begin{pmatrix} ( \\ ( \\ ( \\ \bullet \\ ( \\ ( \\ ( \end{pmatrix}$$
「  
『翼人』だ」  
フェザーフォルク

## 学院をめざして

コハクの出している、『広がりを見せる存在感』を『波動』フェザーフォルクだと  
するなら、『翼人』フェザーフォルクの能力であるそれをもつ彼女は『翼人』フェザーフォルクである・

・  
という理屈は解る。

解るが…

「羽…」

「ん？」

フェザーフォルク

「翼人は、羽を持った人間なんでしょう？ 彼女には羽はありません」

サリアの『魔石』ツエナの糸で拘束され、手も足も出ない状態であるが、  
ピニオンは大分落ち着いてきた。

彼らの話をきちんと聞こうという気になってきていた。

悪い人間には見えないし、自分を利用する必要もないほど、賢く  
て強い。

にもかかわらず、彼女に関する、どうやら確からしい… 少なく  
ともピニオンの納得できる話をしてくれている。

邪魔なら殺せば良いだけだ。でも、納得してもらおうとしている。  
だから、ピニオンは質問を始めた。

彼女に羽がないのはどういうことか？ と。

「…そこまでは解らない。しかし、似たような魔法があるにしても、  
同族であるグウィン先輩が『波動』を受け取って、確信した以上、  
俺たちはその仮定を前提に行動している。

とりあえず、この事態は予想していなかった。グウィン先輩も、  
『隠れ里から出てきたガキが、なんとなく出してるか、厄介ごとに

巻き込まれたとかじゃないか？」くらいの認識だったしな。見世物小屋にでも捕まってるんだろって話だったのに、森の中の聖域みたいな場所で眠る、琥珀に閉じ込められた美少女とはね」

この人たちにとっても想定外の話なのか。

となると、謎が全て解消される事は、この場ではありえない。

「ただ、腕を失っても人が生きていける場合があるように、この娘が何らかの原因で翼を失ったという事は考えられるかな。生まれつき翼のない突然変異だったのかもしれない。僕らは『波動』を出していた時点で『翼人』だと確信している、というだけのことさ。キミにとってそれが真実かどうかは解らないし、本当のことはこれから調べるしかないしね」

もつともな話であつた。

「駄目。読めない。断片的な映像や大まかな感情を拾う事は出来るけど、意思疎通までに至らない。グウィンに見てもらっしかないわ」

「『魔石』でも駄目か… ああ、説明しておくと、この『魔石』を変化させた物… 今はこの赤く透明な糸。これを互いに触れ合っている物同士は、心で会話が出来る」

聞いてもいないのに解説してくれる。

！

待ってくれ、と言う事は…

「そう、あなたの考えている事もわかっているわ。魔石の主人は私だから、私の心は読ませないし」

(こうやって、一方的に心へ声を送る事も出来るの)

「ラトがあなたにそれなりに対応するのも、私が何も警告しないからよ。あなたは本当に、偶然見つけただけなのね。彼女を利用する気も全くない、と。それなら、ある程度話して、彼女のためになるのだと解って欲しかった訳なんだけど、……ラト、いい？」

「何？」

「多分だけど、彼女、『悟られ』…… とうか、伝える方の能力が止まってるみたい。だからかしら。こちらで読もうとしても読めない状態なの」

「そうか…… でも、先輩は他の仕事もあるしな。切り離せるんだろ？ それ」

「うん、大丈夫」

切り離す？

言うが早いか、サリアの『魔石』が、コハクの琥珀にめり込んでいたガジュマルを切り裂く。

突き出た糸からグイグイグイと耳ざわりな音と火花が散る。あの細い糸のどこにそんな力があるのか、ガジュマルとコハクは切り離されて、数百本の赤く透明な糸が突き刺さった状態で、めこりと浮き上がる。

「な……！」

「うん、成功。…… ああ、言っておくけど、この子が生きてこれたのは、このガジュマルが琥珀に枝ごとめり込んで栄養を直接分け与えていたからで、魔石を刺して、ガジュマルに力を注ぎ込む事で、同じ効果を生み出すように調整したから、今後道中この子の体調の心配は要らないから」

(……便利なのは間違いないだろうけど、一方的に読まれる状態だともものすごく不快だ)

「それもそうね。ごめんなさい。今解放するわ」

しゅるん、と『魔石』がほどける。元の魔石のほうへかえっていった。

「で、彼女が…… 回復…… じゃない。えーと……」

ラトがぼそりとはさむ。

「『復活』とかでいいか？」

「ん。それで。……で、ね？ ピニオン君だっけ。今後の事だけど、私たちは、彼女を復活させるにはどうしたらいいかを仲間に聞きに行くために、一度本拠地に戻りたいと思っているの。このまま彼女ごと連れて行って、ね。貴方はどうする？」

「僕は、彼女から目を離したくない。どうもこうも、無理矢理にでもついていきます」

「そうだろうね」

ピニオンは、サリア、ラトと共に、コハクを、彼らの本拠地……『カーリマーズ学院』の、カルファト教授の研究室に運ぶ事になった。

まずは街道まで出なければならぬ。そこからすぐに、ハルツ・エスハーンの国境である、要塞『キュクス』が見えるはずであった。

## キャロルで憂鬱

( (・) )

『波動』が時々来るたびに、ほつとする。

彼女が生きていると知ることが出来るたびに、こそばゆいような幸せが胸を満たす。

……これが無ければこの旅はついて来たくは無い。寂しさで死にたくなるかもしれない。

ラトとサリアは恋人同士だ。それは本人達からも聞いたし、見ていれば解る。

「……おなかすいた」

「もうないぞ。馬車にいつぱいの食料が3日でなくなるってどういう計算なんだ」

「おなかすいた」

「話聞いてるか？ サリア姉<sup>ねえ</sup>」

「すいたつたらすいたもん！！！」

子供かこの人は。

「……この先の村で先に交渉しておきます」

「すまん。助かる」

どのみち配役はこれ以外ありえない。

( (・) )

なんだか慰められてるような気がした。

(・)

あの後、三人は、ひとまずピニオンの小屋まで戻った。

コハクを運ぶのはサリア一人だった。

運ぶといっても、魔石がスライムのようになって、クッションと荷車の役を同時にはたしていて、危なげはなかった。

それはいいが、じゃあピニオンやラトが楽だったかと言えばそういうわけでもない。

この運び方は、常に魔石を使い続ける状態なので、膨大なエネルギー……『魔石<sup>ツエナ</sup>』で言う所の、『熱量<sup>キヤロル</sup>』を必要とする。

しかもこのエネルギーは、よく言われる『魔法』とは違うらしく、『精神力』をエネルギーとして使うのではないという。じゃあ何を使うのかというと。

『食べ物』なのだそうだ。

サリアが食べた物の中で、脂肪などになってしまいうる余分な栄養を、魔石が勝手に吸い取るらしい。

他にも、直接、『食べられる』とサリアが認識しているものを、

魔石に溶かしてもよいのだが、効率は悪いようだ。  
つまり。

今までのガジュマルの代わりに、コハクにエネルギーを送る役割をサリアが受け持つという事は、サリアは、魔石を使い続けるエネルギーと、コハクに送るエネルギーと、自分の分……その合計分、

何か食べねばならないのだ。

「多分一日12、3人分だと思う」

さらっと言われたが、とてもではない。早くカーリマンズ学院につかねば、この旅そのものが立ち行かない。

プロフ村まで戻った時点で何とか馬車を譲ってもらい、ピニオンの蓄えを一切合財持ってきたが、レイゲンの町に着くまでに、その半分が彼女の胃に消えた。  
泣くしかない。

（（・））

レイゲンの町ではまだ良い方だった。琥珀を削って換金が出来たからだ。

琥珀は宝石の中ではそこまで高価な部類でもないが、やはり粒の大きいものは価値がある。

取り扱いが難しく、額が額になってしまつので、ブラッシカも最初は難色を示したが、儲け話であることには違いが無いので、迷っていたようだった。が、ラトのアドバイスで、

「これは、プレゼントって事でラシィにあげるよ」

と、グリッターの綺麗な所を小さめのティアドロップにして渡すと、首を縦に振ってくれた。

ピニオンもダシにされたのはわかるが、何も言わない。

ハチミツの壺やら度数の高い酒やら、油の樽やらを買い込んだ。

「油って…… まさか、飲むんですか？」

「野草に小麦粉つけて揚げるんだよ。手間はかかるが熱量は高いし



元手が安い。廃油は魔石に溶かせるしな」

いやなこなれ方である。

ちなみに後で食べさせてもらったら結構美味しかった。

（（・））

そんなこんなで街道に出て、今に至る。

魔石はある程度、熱量キヤロルをため込む事が出来るらしいのだが、その量に満ちるまでは、術者、つまりサリアが常に空腹になるデメリツトがあるらしい。今回は、運ぶ分までサリアが魔石を使った反動で蓄えをカラにしまい、それが長く続いているようだ。

エネルギーの補給は死活問題だが、安くて腹持ちがいいだけの物を大量に食べさせると後で機嫌が悪くなるらしく、ラトは予算内で少しでも『美味しい物』を食べさせようと工夫していた。スパイスや調味料の類は、旅人とは思えない種類を持っていたし、保存食の種類も豊富であった。

一方ピニオンは現地調達ならラトより数段上なので、先行して狩りや採集を良くやった。

新鮮な食材であれば良いものが作れると、ラトは嬉しそうにしていた。

サリアはコハクの面倒を見ているのだから仕事はしているのだが、はたから見ると食って寝ているだけだ。

あの村で補給が出来れば、後2日で国境の、要塞『キユクス』である。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7283x/>

---

キュクスの叫び

2011年11月24日21時49分発行